

I A—25 精神発作の発展様式とその予後

福島県立医科大学神経精神科

○横山富士男・高橋 志雄・中西 重雄・
本多 幸作・小野 常夫・石下 恭子・
八島 祐子・熊代 永

目的 精神発作はてんかん発作の国際分類によると言語障害、記憶障害、認識、感情、錯覚および幻覚の六つの発作亜型に分類されている。今回、我々はこの精神発作を主徴とするてんかんの発作の発展様式とその予後について検討した。

対象と方法 対象は当科外来及び関連病院3施設に通院加療中のてんかん患者926例中、発作性の体験内容に再現性があり、しかも発作間歇期脳波に発作と関係ある異常波を示した精神発作の52例である。そして、その発作亜型、発作の発展様式、発作以外の精神症状、脳波所見、脳CT所見およびそれらの予後について検討した。

結果 ①52例中、単一の発作亜型をもつもの38例(73.1%)、2つ以上の亜型を別々にもつもの8例(15.4%)、1つの亜型から他の亜型に移行するもの5例(9.6%)などであった。②52例中64の精神発作の亜型がみられ、発作亜型の頻度は幻覚17亜型(26.6%)、感情14(21.9%)、言語障害11(17.2%)の順であった。③発作の発展様式については、1つの亜型から速やかに大発作に発展するものが28亜型(43.8%)と最も多く、次に自動症に移行するもの10亜型(15.6%)、1つの亜型のみで終るもの10亜型(15.6%)などであった。④脳波所見では、左半球か右半球に焦点性異常をもつものは同数で各々20例(38.5%)であり、部位別では側頭前部に最も多く、前頭部、側頭中央部などにもみられた。⑤発作以外の精神症状は21例(40.4%)にみられ、性格変化10例(19.2%)、精神病状態8例(15.4%)などであった。⑥頭部CT所見では、32例中16例(50.0%)に異常がみられ、側頭葉に局所性低吸収領域を示すものが多かった。⑦この全例52例の予後は、平均10.0年間の経過観察で発作消失31例(59.6%)であり、頻度及び程度の改善は9例(17.3%)であった。次に、発作の発展様式による発作消失の予後は、大発作に至るもの51.5%、他の発作に移行するもの60.0%、1つの亜型のみで終るもの60.0%であった。

I A—26 RDのトンネル現象について

大阪医科大学 神経精神医学教室

大岩稔幸、西浦信博

RD(rolandic discharge)とそれに関連した BECCT(benign epilepsy of children with centro-temporal EEG foci)の問題は、本邦では過去約10年の臨床—脳波—予後学的な検討の結果、てんかん学の関係者には漸く理解されてきたようである。しかし、この問題を主として研究するグループの中では、以下のような争点が、明らかになってきた。即ち、①RDの焦点の決定の際の判読基準、②臨床発作の範囲、例えばシルヴィウス発作以外にも、関連症状としてみとめる可否かの問題、③熱性けいれん、頭部外傷など非発作性疾患とRDおよびBECCTとの関連、またはその臨床的意義、④年令依存性の問題、⑤BECCTの用語の中の、とくに“benign”という意味をどうするか、⑥RDそのものの病態生理、⑦RD以外にみられる各種の焦点性発作波の意義、そして最後に⑧BECCTの疾患単位と国際分類の中での位置づけについて、などである。

今日、われわれは上述の④の年令依存性と⑤の“benign”の問題について脳波的にfollow-upした成績から、興味ある結果を得、RD—トンネルなる現象をみとめたので、これについてくわしく検討する。

RD検索の対象となった患者は昭和50年12月から55年12月までの期間で、19才未満の患者2894名(男子1647名、女子1247名)である。RDの出現は79名(2.7%)である。このうちでRDが消失するまでの期間、脳波的に、また臨床的に追跡したのは50名である。これらの50名については、RDの消失後もなおひきつづきfollow-upしているものが多い。RDは従来から思春期の頃までに消退するといわれてきたが、われわれも自験例にもとずき、この事を確認し、これをRDのトンネル現象と命名した。このRDトンネルに入るまでには、RD以外のその他の焦点性異常波もあるが、このトンネルに入る年令では、ほとんどがRDに変化し、また“トンネル”をでると脳波は正常化することである。かかる用語は患者に前方視的見地から説明する際に、説得的な意味をもつと考える。